

「考えないこと」を考える

二学年合わせて十数人の小さなゼミで、「自分自身」が近代史の枠組みの中でどのように位置づけられるのかを考えています。

柳田利夫
文学部 日本史学専攻 教授

二世の娘の「もう一回日本に行くんだよね」という優しい励ましの言葉に、それまで周囲の呼びかけに興味も反応も見せず静かにベッドに横たわっていた彼女が、突然娘を叱るような厳しい声で叫ぶ。「行くんじゃないよ！ 帰るんだよ！」

十七歳でペルーに渡航してから七十年以上の歳月が流れ、数年前に日本へ「行く」ことを楽しみに生活していた彼女が、今、朦朧とする意識と失われつつある記憶の中で、日本へ「行く」という言葉に強く反発し、日本へ「帰る」と叫ぶ。

私自身の問題関心は、あたりまえのこと、意識すらされないことを、ある特定の時間と空間において生成された歴史事象として捉え直し、現在に連なる近代史の枠組みの中に位置づける、ということにある。移住という現象を研究の主な素材にしているのも、あたりまえがあたりまえでない世界に直面し、自分自身を新しい空間に位置づける必要に迫られる移住者

が、それまで考えなかったことを考えることを通じて、自らのアイデンティティ生成へとつなげてゆくからである。このメカニズムに、近代国民国家の形成という「大きな歴史」を被せたときに、私たちの「小さな近代史」はどのように立ち現れてくるのか、そんなことを考えながら勉強を続けてきた。

近世の出稼ぎ、幕末・維新期の国内移住、戦前戦後の海外移住から現在の日系人の日本への出稼ぎ、日本国内からハワイ、メキシコ、ペルー、ブラジルへと、故郷を離れたさまざまな人々の跡を追いかけてここまで来てしまった。拡散した時間と空間をつなぎ止めているのは、自分もまた移住者である私の、猫のような好奇心だけである。

自分自身と付き合うのに精いっぱい私の私にとつて、研究会は、それぞれ異なった経験を重ねて来た学生たちが、考えること、考えないこと、議論の中で紡ぎ出す言葉、眼差しなどをゆつくりと咀嚼し、現代史の枠組みの中に読み込んでゆくための大切な学びの場となっている。

時代をつかむ

木野涼介 文学部 日本史学専攻3年

私たちのゼミでは、日本近現代の特定の時代や分野の論文を講読し、議論することを通して、それぞれの時代の枠組みを捉えようと試みています。春学期には、明治期の近代天皇制の確立や、戦後の高度経済成長期における工業開発などについての論文を並行して扱いました。

難解な論文が多く、準備は大変ですが、一つ一つの論文を繰り返して読みこんでゆくと、頭の中で個々の事象がダイナミックに結びつき始め、そこから近現代を通底する構造性が見えてくるように感じます。現代の事象を扱う際には、その時代を体験された先生とゼミ生の間で、それぞれの身近な経験を振り返りつつ、それが時代の中へどう位置づけられるかを考える議論がなされたりします。



メカニズムデザインを学ぶ研究会のデザイン

2011年4月に開講したばかりの、メカニズムデザインを主に学ぶ研究会です。
現在、3年生34名（全員1期生）が在籍しています。

坂井ゼミの日々

おかの しんいちろう

岡野真一郎 経済学部3年

坂井先生は半学半教の精神に基づき、ご自身をn+1人目のゼミ生と考えながら、時に優しく時に厳しく、私たちに学問に対して真摯であるよう日々ご指導くださっています。ゼミ生が発表をする際には、「神は細部に宿る」の精神のもと、研究内容だけでなく板書の仕方や話し方まで厳しい指導が飛んできます。

教室の外では、ゼミ対抗のソフトボール大会にゼミ生とともに参加するという徹底ぶり、ご自身のゼミへの強い思いが伝わってきます。研究者として業績を上げながら、教育にも熱心な坂井先生と、新しいゼミをゼロから作り上げていく充実した日々を、ゼミ生一同楽しみながら過ごしています。



さかいとよたか
坂井豊貴
経済学部 准教授

私は今年度、慶應義塾に着任し、研究会を立ち上げたばかりです。ゼミ生は全員1期生ですが34人と大所帯で、皆で試行錯誤しながら、ここから始まる研究会の形を模索しています。

研究会ではメカニズムデザインという、個別の制度の改善に特化したオーダーメイドのソリューションを作るための、経済学的方法を学んでいます。カバーする対象は多岐に亘り、例えば、高く物が売れるオークションルールや、腎移植を増やすためのドナー交換マッチングアルゴリズム、民意を反映する選挙の意思集計方法などの、設計問題を考察します。メカニズムデザインはゲーム理論をベースとしており、経済実験も扱います。それゆえ経済学としては「先端科学」の色彩が強く、また現実への応用可能性が高いです。ただし、先端科学は定義上、風化が早いので、いかに風雪を耐え抜いた教養を同時に身に付けさせるかが、目

下の私の課題です。

ゼミ生の特長は、とにかく元気が良い、あるいは個性が強いことだと思っています。教壇から彼らを見渡すと、まるで動物園のように楽しいです。みな優秀ですが、自信に能力を追い付かせる力が強いと言った方が、より適切かもしれません。出来ると思ってたていううちに出来てしまう。ゼミ生にさらに期待することは、これから一段階、本質的に知性のレベルを上げてから卒業してほしい、ということなんです。課題をクリアとか単位をゲットなどでなく、「命がけの跳躍」をしてほしい。それを可能とするようゼミに関与することが私の役割と認識しています。

研究会を、慶應義塾の目的を明確に反映した場として成立させることを、自身のミッションとして位置付けています。容易ではありませんが、この贅沢な試みに挑戦する機会を得たことに深い喜びを感じています。ゼミ生とは特に「半学半教」を意識しつつ、日々の交流を楽しんでいます。

水分子のふるまいから複雑系としての生命現象をひも解く

オープンかつ国際的な環境のもとで切磋琢磨し、
自らの「curiosity」と「passion」を武器に粘り強く、オリジナルな研究を目指そう！

やすい まさと
安井 正人
医学部 教授

「生きている」とは、どういうことなのか？ とでも簡単そうですが、いざ答えようとするとき意外と難しい奥の深いテーマだと思えます。幸運にも我々は、「地球」という大変美しい惑星に生存しています。地球以外にも生命が存在するかどうかはさておいて、地球上の生物は、「水」と「空気（ガス）」によつて生かされているといつても過言ではないでしょう。実際、ヒトの体の70%近くを水分子(H₂O)が占めています。「水に対する理解を深めることで生命現象の本質に迫っていきたい」。そんな思いで、「Water Biology」という概念を提唱しました。すなわち、「水分子のふるまいから生命現象を捉え直していく」ことを目指して研究しています。具体的には、従来の分子・細胞生物学、生化学的手法に加えて、(1)最先端の光学系技術を駆使した水分子のイメージング、(2)コンピュータによる水分子のシミュレーションなどを取り入れて、

生体における水の役割を理解していきます。これらの研究は、薬理学の分野においても、消化管上皮や血液脳関門における薬物の吸収や脳組織における薬物動態のより正確な理解につながると考えています。

我々の研究室では、オープンで活発な雰囲気を感じられるように心がけています。そして、国際的な環境を作り出していきたいと思っています。サイエンスに環境なし、出身国にかかわらず若い学生たちが切磋琢磨して研究することで一生涯続く友人関係を育てていってこれればと願っています。それから、若い学生たちにも伝えていくことは、「わかりやすい形容詞を持つように！」という事です。将来、プロとして活躍する上で、「何々の誰」と思い出すてもらえるような形容詞を持つことができれば本望だと思います。

明るくグローバルな研究室

は ゆう だ あ き こ
羽入田明子 医学部6年

医学部では大学4年時に自主学習という科目があり、60近くのテーマから研究室を選び自由に研究することができます。私はイオンチャネルの機能解析に興味があったため薬理学教室へ見学に行ったのですが、足を踏み入れるや北欧の香り漂う研究室に一瞬で惹かれてしまい、ふと気づくとCl⁻チャネルの研究にすっかり夢になっていました。学生でもランチを食べながらのヌーンカンファレンスや週1のミーティング(英語)に参加し各プロジェクトの先生方と自由に討論できるため、テーマの方向性やプレゼンの仕方について大変勉強になります。また、研究の集大成である自主学習成果発表会に向けてのプレゼン準備やポスター作製、場合によっては論文発表に至るまで安井先生をはじめとする研究室の先生方が熱心に指導してくださり、学生でも独創性豊かな研究をすることができます。



人はパンのみにて生きるにあらず—豊かな心の営みに向けて—

『高齢者と共に』を考える」研究会に集うのは“心と心をつなぐ”ことに、
限らない関心を抱く総合政策学部・環境情報学部の2年生から4年生

相互に高め合うつながりを求めて

あさの しょう 浅野 祥 総合政策学部4年

人と人のつながりとは、今も昔も変わらない数少ないものの一つといえると思います。そんな人のつながりの中でも、私たちは高齢者とのつながりを考えています。それぞれが各々の観点から問題意識を持ち、日々研究に励んでいます。

私たちの研究対象は“人”に関わることでありますから、もちろん答えのある世界の話ではありません。そこではやはり、人同士のディスカッションが必要不可欠なものであり、毎回人間味あふれるディスカッションにより充実した時間を共有するとともに、互いを高め合う良い関係のもと研究を進めることができている。このような素晴らしい仲間や森先生のもと、自分の目標に向かって高いレベルで研究できる環境に感謝しています。



もり 森さち子^こ
総合政策学部 准教授

SFCは、さまざまな研究者が息づく坩堝^{るつぼ}と言えましょう。その大きなキャパシティの中で、私は一人の教員として、“とらわれのない自由な感覚”を味わっています。そしてSFC生は、まさにその“自由さ”を実感し謳歌していると思います。

臨床心理、精神分析の領域をバックグラウンドにもつ私は、“一人一人の心の中の動き”、さらに“人と人との心の関わり合い”を探求しています。そして繊細な心の交流が織りなす臨床世界を大切にしながら、その経験をキャンパスの中

で、さらに地域活動に生かし、学生との時間を過ごしています。森研究会は、二つあります。その一つ、“子どもの発達を考える”

研究会は、環境情報学部教授濱田庸子先生と合同で行っており、本誌2011年春号に詳しく紹介されています。もう一つは、2009年に始めた『高齢者と共に』を考える研究会です。この二つの研究会がテーマとするのは、端的

に言えば、人生の“はじまり”と“終焉”です。赤ちゃんの世界と老いの世界は、どちらも言葉を超えた交流がもつとも大きな意味をもつと思われるライフステージです。そしてそこに生起する心のありようを研究する主体が、思春期を卒業したばかりの“青年”であるということに、私は深い関心を抱いています。

赤ちゃんのその小さな口から、はじめて“言葉”が生まれる瞬間に立ち会い、感動を覚える学生。かたや死に向かって“今、そしてこれから”をいかに生き、どのように人生の幕を閉じるかをめぐって真剣に考える学生。

彼らと共に語り合う研究会は、塾生だった頃、ライチウス会というボランティアサークルや人間科学専攻の仲間と議論した、かつての自分自身の体験を重ね合わせつつ、“生”の本質に触れる時間です。人は物質的に豊かになっても、それだけで心は満たされることはない、心と心をつながりこそ大切であるということを暗黙の知とし、それぞれの研究テーマに取り組み学生に大きな期待を寄せる日々です。

天然資源を人の健康に役立てるために

天然医薬資源学講座では、薬学の中でも最も古い研究領域の一つである「天然から得られる薬に関する研究」を、さまざまな角度から行っています。

薬学部 教授
木内文之
きうちかみゆき

現在、薬といえば純粋な化合物を使うのが普通になっていますが、約200年前までは「くすり」はすべて自然の中から得られる素材でした。その後「くすりの精」を取り出そうという試みが19世紀に始まり、有機合成化学の発達とも相まって、モルヒネをはじめとする数々の医薬品が生み出されてきました。自然界にはまだまだ新しい薬の種が眠っており、この種を見つけ出すのはとても魅力的な課題です。一方、現在の日本の医療の中に定着している漢方で用いられる薬（漢方処方Ⅱ生薬の組み合わせ）には、今でも動植物などの自然から得られる生薬が利用されています。生薬は天産品ですから品質にばらつきがあり、これを薬として安心して使うためには品質の確保が欠かせませんが、そのためにはどうして有効なのかのエビデンス（科学的な裏付け）が必ずです。

私たちの研究室では、「天然物を

人の健康に役立てる」ことを大きな目標に、「天然薬物中の薬効成分の探索」、「漢方薬の有効性の科学的裏付けの構築」、「寄生虫などが持っている糖鎖の合成とその機能」に関する研究に取り組んでいます。私たちの研究は、化合物に基盤を置いていますが、実験に用いる手法はさまざまです。この領域は「使えるものは何でも使う」という伝統(?)の下で、新しい手法を常に取り込みつつ発展していますが、学生諸君には「やってみなければ分からない」を基本理念(?)に、実験から得られた結果を大切に、それを自分なりに理解して論理を組み立て、新しい発見に結びつけていってほしいと思います。「薬学」は文字通り「草(Ⅱ自然)を楽しむ学問」でもあると思います。実験と学生諸君とのディスカッションを通して、自然の中にあるさまざまな化合物とのふれあいを楽しんでいきたいと思っています。

自然の中の薬

しずまひさし
静間悠志 薬学部薬科学科4年

当研究室では、生薬の持つ成分の研究、天然物由来の糖鎖の合成のふたつを軸に研究を行っています。生薬成分の研究は、生薬に含まれる成分の分子構造や生物に対する活性を調べる研究です。この研究でもし生物活性のある物質が見つければ、医薬品の開発に利用できるかもしれませんし、なぜ生薬が効くのかを成分レベルで知ることができます。糖鎖の合成では、主に寄生虫の持つ糖脂質や糖タンパク質の糖鎖の合成を試みています。こちらは合成した糖鎖の寄生虫の診断薬などへの応用を目的としています。のんびりした空気の研究室ですが、一人ひとりが自分のテーマと真剣に向き合い、先生や先輩から知識や技術を学びながら研究を行っています。

